

田園風景から歴史深い折りの道へ

度会郡玉城町

国束山周辺

度会郡の玉城町と度会町の境界線上にある国束山は、標高414メートル。頂上をめざすルートはいくつかありますが、今回は、玉城町原にある「アスピア玉城」から出発し、頂上を経て、再びスタート地点に戻ります。

国束山は、古い由緒を持つ国束寺が^{くづかじ}あった場所。頂上付近には大きな伽藍^{がらん}の跡が残り、白山社なども祀られています。広々とした田園風景から山に入り、岩や木々の間を曲がりながら続く細道を頂上へ、古くからの祈りの道を歩く変化の大きいコースです。ご案内いただいたのは、国束寺のご住職、土面 信順さん。現在、お寺は度会町側の国束山南麓に移転していますが、折を見て旧地の整備などに通っておられるとのこと。長い歴史の物語をはじめ、興味深いお話を伺いました。

取材・文：堀口裕世



「アスピア玉城」内「ふるさと味工房 アグリ」



広い「お花畑」を見ながらスタート



「弘法石」。「海」などの文字が読み取れる



「と石」。谷水が多いときは中央の水が流れる

「アスピア玉城」の花畑を通して

玉城町原にある「アスピア玉城」は「弘法温泉」などで知られる複合施設。今回はここからスタートし、すぐ西側にある道へ入り、南に向かいます。右手は広々とした田園風景。この辺りは、里山の花畑プロジェクトの舞台で、季節によつてはひまわりやコスモスなどが咲き乱れる風景が見られます。

前方に見える山並みの右から二つ目がめざす山頂。しばらくは舗装された道を進みます。伊勢自動車道の下をくぐると道が細くなり、二つの池の間を通ります。池を過ぎると、道に沿ってせせらぎが流れ、たくさんさんのサワガニが出迎えてくれます。「地元では百瀬川と呼ばれる小川で、新池に流れ込みます。池から外城田川^{とくだがわ}に向かって流れる川は国束川と呼ばれています」と土面さん。川が小さな滝になって流れの方向を変える地点で、道は川を越え山へと入っていきます。

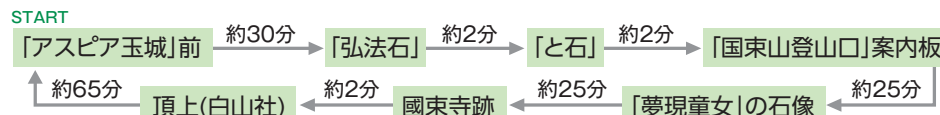
「弘法石」と石を過ぎて山中へ

川を渡ってすぐにあるのは、苔むしたお堂の中の「弘法石」。「当寺に、弘法大師空海が国束寺に参詣し弁財天堂を勧進したという由緒書きが残されており、後に村人が『空海敬白』の文字を彫った碑を建てたのですが、川に沈んで分からなくなっていました。これは平成4（1992）年に約200年ぶりに発見されたものです。この石が引き上げられたのと同時期に温泉が見つかったことから『弘法温泉』の名の由来にもなっているんですよ」と、平安初期から現代にまで続く物語を教えてくださいました。

少し進むと、平らな巨石の中央に直線的なくぼみのある「と石」と呼ばれる石



■ 行程図 所要時間／約3時間 ※所要時間は、おおよその目安です。





旧國東寺跡。お堂の礎石が並んでいる



かつての國東寺。大きな建物が連なっていた※



現在の國東寺(度会郡度会町平生)



頂上付近にはさまざまな石像や石標が



白山社

山寺というイメージとは違い、大きな伽藍が並んでいたことがしのばれる広い

國東寺跡を経て頂上へ

しばらく進むと國東寺跡に出ます。

の町並みを見渡すことができる場所に出ます。この辺りからは傾斜がぐっと緩やかになり、左側の木々の間に四角い石が点々と落ちて見えます。「寺を移転する際に、ここから麓に向かってケールを渡し、木材や礎石を運んだのですが、そのとき落ちてしまった石です。こうして見ると結構な数の石が落ちていきますね。」

空間です。「およそ1400年前、聖徳太子が皇大神宮のお告げを聞いて開かれたといわれ、弘法大師が国東山を『胎藏界曼荼羅の山』と称賛されたことから、密教の修行の場として栄えました。最盛期には六院一三坊の大寺であったそうです。戦国時代に戦火で焼かれたり、江戸時代の天台宗の寺院としての再興、明治時代の神仏分離令と歴史の荒波を越えてきましたが、第二次世界大戦後の農地改革などにより山頂での寺院経営が困難になり、ご本尊や観音堂などは大阪の四天王寺に、その他のお堂などは度会町に移しました」。

問 國東寺

TEL 0596-62-1018
「ふるさと味工房 アグリ」
TEL 0596-58-8686
※アスレチック内の「ふるさと味工房アグリ」では、随時 国東山ハイキングツアーが行われています。

つづら折れの参道を

ここから、急な斜面を右へ左へと折れ曲がる山道が続きます。「国東山は、釣り鐘のような形で、はじめは急傾斜ですが、やがてなだらかになります」との言



登山口の看板から山道へ



急傾斜を右へ左へ曲がりながら上る



「夢現童女」の石像



木の間から玉城方面を見下ろす

葉に励まされながら上って行くと、岩や木立の間の細道には敷石のように自然石が並んでいます。石がずれないように鉄の杭が打たれ、道にかかる木の枝が伐られているのを指し、「道を整備してください」とのことです。かつて参道であったこの道は、いわば祈りの道。今もこれを守る人々の想いの力を感じます。

「これより十丁」の「夢現童女」

傾斜が少しゆるやかになった辺りで「夢現童女」の小さな石像に出合います。

彫られている「これより十丁」は頂上までの距離。「以前は寺から麓まで、一丁(109メートル)ごとに石像が祀られていました。昭和28(1953)年に寺を移設したのですが、その後、これらの石像の多くも移しました」。

ここから少し上がると隣の山に続く分かれ道があり、70分ほどの山公園に行けます。近くに「左上岩屋道」という石標と分岐点もありますが、こちらは危険なので、慣れない人は避けた方がよいとのこと。

さらに少し上ると、木の間から玉城町